

人が本当に救済された状態について、その心のあり方や行動を正しく伝えるのは、なかなか難しいのですが、およそのことは示す必要があると思います。以下にこれを書いておきましょう。

まず、自分ことを常に省みられる心になる

救済されたということは、人がもともと持っている人間的な知識や道徳から解放されて、神様の心である「すべての人を同じように愛する慈悲寛大な心」となって、どんなことにも「自己反省をする気持ちになる」ということです。この自己反省が、最高道徳に入る最初の門です。

するとその精神の奥に、温かく柔らかな優しい心が絶えず湧き出てくるようになり、頑固で角のある気持ちが段段となくなっています。その気持ちで「温かな柔らかな優しい気持ちを他の人の心にも移し植えよう」と心がけ実際に取り組むようになれば、いよいよ本当に救済された人になりかけてきたということです。

〈駄目な人図鑑〉

この自己反省ができずに、他人の行動ばかり目について、高慢な人だとか、欲の深い人だと評している人は、本人がその「批評しているような人」であることを自白しているようなものです。まず、こうした精神状態が改善されることが、その人が救済される始まりです。

円満に対応するが、無意味な服従や苦痛は受け入れない

さて、人間がそのようになると、精神が平和になって、その態度が円満になります。例えば、自分の右の手を打つ人がいたならすぐに謝罪し、なおも相手が攻撃してきたら逃げるのです。もし右を打たれたのに左を打たせると、相手の罪が重くなり自分はもっと痛くなります。最高道徳は知識をともなう道徳ですから、意味の無い服従や苦痛は受け入れません。

〈駄目な人図鑑〉

もし右を打たれたのに左を打たせると、相手の罪が重くなり自分はもっと痛くなります。

独善的な熱心・忍耐・克己は最高道徳ではない

また、命じられた仕事が終わっても、上司の指示を受けない間は、自分の判断で次の新しい仕事に取りかかりません。指示を受けずに取りかかれば、どういう不都合ができるかわからないので、新しいことは必ず上司の指示や確認を仰ぐのです。なにをするしても、神様の心に従って報恩と相手の心を救いたいという、真の慈悲心をもって取り組み続けるので、心の働きも行動も自然で平和的で円満です。

〈駄目な人図鑑〉

命じられた仕事が終わると、上司の指示・確認を得ずに、自分の判断で新しい仕事を始めてしまいます。こうした独善的な熱心さや忍耐・克己などは、基本的に私欲の現れであり、軽率さや急激さ、熱狂・難行・苦行などに陥ったり、他人への不平を抱き嘲笑することがあります。

注) この教訓は、約定規に守るだけでは、間違いを犯す恐れがあります。緊急の場合は自分から上司に声をか

け、確認をした上で行うとか、上司の確認が取れない場合は、代わりの人や周囲の人と相談した上で行い、その内容を記録しておき、できるだけ早く報告するなど、臨機応変に対応しましょう。大切なのは「上司に安心していただくという心の働き」と、そこから生まれる行動です。

救済された人の雰囲気は深い淵のよう

本当に最高道徳によって救済された人の振る舞いは、たとえるなら深い淵のようなものです。その水の色は青くもあり黒くもあって、生き物はいるのか、水の深さはどれほどか、その水はながれているのかなど、いずれも見分けはつかず、その中になんともいえない神聖な気が秘められているようにみえます。その淵にたたずむ人は、ある種の靈感を得たような思いを覚え、自然にその人に引きつけられ、たとえ利己心に満たされた凡人であっても、最高道徳的な心になっていきます。

なぜなら、最高道徳を体得した人は、他人に対して「その人を救済したい」という思いしかないからです。その周りは和気藹々として春のようで、見ず知らずの人でも心が和らいで安心してしまいます。このとき訪れた人の心に、最高道徳の種が植え付けられるのです。このようにして、救済された人の感化力は、世界の平和と全人類の幸福を実現していくのです。

〈駄目な人図鑑〉

普通道徳の人の場合、どれだけ優れた慈善家。宗教家だとしても、その人を前にする人の心には、必ず警戒・恐怖・心配があります。これはその主人の心に、外から来た人に自分への良い感情を持たせようなど、いろいろな利己心があるからです。善意で迎える場合でも、こうした利己心あれば、相手の心は無意識に不安を覚えます。また、相手の心が最高道徳の種を受け付けない畠であれば、救済された人の精神も態度も映ることなく何も感じないでしょう。こういう人たちは昔から聖人を至るところで苦しめてきました。

参考までにさらに詳しく、救済された人とそうでない人の心の働きと行動を比較してみましょう。

救済の原動力が最高道徳の原理の全てで、全人格が変化している

最高道徳よって本当に救済された人は……

第一に、救済の原動力は、聖人の実行に一貫する最高道徳の原理の全て（※）なのです。

第二に、その全精神が開発・救済されているので、改心によって全人格が変化しています。

ですから、神の心に一致する真の慈悲心をもって、まず伝統と準伝統を真の親として尊敬し養います。

次に家族・親族・使用人・救済した人々に対して、真の子として物質的・精神的に養い育てる心を持っています。

そのうえで、一般社会の人々とその生産的な事業に対しても敬い愛します。

このように一切の出来事を自然（神）に任せて安心し、自分の最高品性の完成に努力するのです。

伝統に対して公平で、従うことには迷いがない

ですから伝統に対しては……

第一に、あらゆる伝統的存在に対して公平であり、どれか一つに偏ることはしません。

第二に、伝統の命令の内容によって、服従するかしないか迷ったりしません。

その命令の内容はひとまず問わないで、伝統を喜ばせ安心させるために服従するのです。これも慈悲の心であり、それが本当の意味で自然の法則に適うことになります。

〈駄目な人図鑑〉

もしこの原理に背けば、どれだけ伝統や準伝統に犠牲を払い、経済的な便宜を図っても、その努力は牛馬が人のためにする努力と同じになってしまいます。救済された人と救済されない人の努力の結果の違いはここに起因します。そして伝統を喜ばせ安心させるのは、自分の品性のためでなくてはなりません。伝統に対する奉仕や報恩を、やむを得ないことと考えてしまうと最高道徳にはなりません。

伝統を見捨てたり攻撃せず、とことん服従する

第三に、どの伝統にどんな非常事態が生じても、見棄てたり攻撃などしません。

非常事態となれば、多少は物事をまげなくてはならないと思うでしょうが、最高道徳ではとことん服従することを原則とします。もしそうなったなら、純粹正統の学問（最高道徳の原理）によって対応を考えれば良いのです。そのようなときこそ知識が必要ですから、最高道徳が知識を尊ぶのは当然です。絶対服従することで真の慈悲・至誠・犠牲となり、運命が開いていくのです。

〈駄目な人図鑑〉

伝統を見捨てたり攻撃すると、完全に最高道徳の立場を失います。「教えの親」として人の上に立つことも、最後の勝利も永久の幸福の享受もできません。もし最高道徳に救われていない人たちが大勢も賛成しても、それは全く無効です。

そもそもこの「絶対性」に定まっているければ安心立命はできません。自分の各伝統に対して「こんなことが起きたらどうしよう」などと実際に起きていないことを考えて、心配のあまり絶対服従の原理が心に納らまない人は、とても慈悲も至誠も安心も天命に安らいで神に信頼することもできるものではありません。絶対服従できなくては真の慈悲・至誠・犠牲とならず、運命が開いていきません。

〈エッセンシャル〉 絶対の意味を正しく理解すること

とにかく「絶対」でなくては、安心立命や開運に繋がらない。普段の暮らしの中で「もしこんなことが起きたら伝統に対してどうすればいいだろう」なんてことを考えてるレベルでは、絶対とはいえない。絶対服従できてるなら、事が起きたときに考えれば大丈夫。そういうときに備えて、最高道徳では知識を尊んでいるんだからね。

〈k2〉

そもそもここんところのLogicが必要。

伝統に対して普段から絶対服従できてる=無我になって神意同化できていれば、世間的な非常事態であっても安心立命できるんだから、発想が豊かになって切り抜ける路を見いだしたり切り拓くことができる。しかも普段から安心立命しつつ（つまり自分を守る狭い視野で生きてるんじゃなくて、自他の幸せを広く見つめながら暮らしてることから）知識も経験も豊富だし、そもそも質が違う。周りとの関係も違う。困ったら正直に伝えたり相談できたりすればいい（それも最高道徳的にやるので、単にすがるということではないはずだし）ので、まぁとにかく事が起きてから対応すればいいってことになる。そもそも、起きた事をつぶさに観察して識ることから始まる

わけで、たならばの虚しい妄想なんてもに因われること自体、世界や自分に関する純粋で正統な知識が不足しているし、身についてもいないんだから、救済とはほど遠いよね。

それにしても「絶対」とか「服従」って言葉だけ見ると、なかなか過激な表現に感じる。そもそも、これはすべて「伝統」に対しての事。「伝統に対して絶対服従する」ということは「自らの意志で、宇宙の生成化育の働きと精神的に同化する」ということ。そしてこの同化は、自分自身の「最高知性と最高感情」によって、その精神の中で行われる。

純粋正統な知識とは、完全に事実に即した、事実そのものを知識化した情報のこと。例えば僕たちは「共進化」の一部であって、生きていく範囲での環境とは相当な親和性がある。また僕たち人類は共進化の中で「主体性という高度に発達した自意識」と「自意識の発達と不可分な高度な知性」と「時間や空間を種を超えるほど高度な共感性」を持っている。

これがどう使われてるか、どう使うのかという点で、混乱は起きているが、これらの能力が進化の中で培われ、個体差はあるとしても僕たち一人ひとりの標準装備になっているのは事実だ。

こうしたことを裏付ける知識を得て（開発）、経験を通してこの知識が事実であることを体感し（実行）、自分が生きる前提として感情や意識を変容すること（救済）で、自分という存在のあり方が高次の存在となること（同化）が、最高道徳的に救われて真の慈悲心を体得した人になるってことだろう。

この理解や感得といった成長はすべて精神の中でしか行えない。この世界は相対的な次元にあって、すべての出来事はどこかに不完全さが残るようになっている。だからこそ多様性が生まれるのだし、だからこそ我々は成長できる。

これもまた純粋正統な知識の一部である。ものすごくベタな表現をすると、純粋正統な知識とは「言われてみればなるほどそうだね。当たり前のことだね」というものだ。

もうちょい追記すると、こうした能力や世界のあり方が、人間にとての喜ばしい（つまり生存・発達につながる）ように機能するには、それらが神意に同化した人との関係性の中で実現される必要がある。だからこそ人は最高道徳に根ざして（つまり神意と同化するために、神意と同化しつつ）行わなくてはならない。

しかもそれは、精神の中という、完全に独立した情報系の中で行われるので、どこまで行っても個別性がある。けれどもその本質は、人類や世界に共通する事実としての純粋正統性に根ざしているので、結果として他の存在との共感・共鳴が生まれ、現実的な協働や共生につながっていく。

この最高道徳によって高次化していく感覚は、手応えのある物を運んで据え付けて動かす物質的・物理的とは違って、精神の有り様を変化させていく化学反応を起こすイメージに近い。その精神領域での化学反応が起きた先で、行為やたたずまいといった物理的な現象に変化が現れる。

新しいことや大事なことは伝統に相談する

本当に救済された人は、何か新しい事や重大な事については、父母や祖父母に相談し、それでも分からることは、精神伝統にあたる最高道徳の先輩や自分の心の師などに相談します。それでも決めかねたら、より遡って聖人の教訓や天啓を調べ、モラロジーの原理を使って決定します。自分の精神が本当に救済されたなら、自然にこのような態度になります。決して自分一人の考え方で決めないように！

〈駄目な人図鑑〉

新しいことを自分一人の知識で決めている間は、どれほど賢明な人でも、その精神はまだ最高道徳に救済されていません。自分の高慢心や物質欲などが精神の中に残っている証拠です。

直接相談できないときは神の心や科学の原理に沿う

この論文を書くに当たって、一言一句、自分の考えだけで書いてはいません。常に、これはどう書けば神の心（聖人の教訓）に適うかを考え、このように書いたとして現代科学の原理に許容されるかどうかを考えて決めていました。直接指導を受ける人がいなかったので、こうせざるを得なかったのです。

〈駄目な人図鑑〉

大体において宗教団体の信仰は、その団体の利益に偏っていることが多いので、自分の進退を定めるときには、安易に宗教団体の指図に任せではありません。必ず最高道徳的な方法によらなくては、自家百年の幸運を開くことはできません。大体、宗教団体の実際の信仰を見ると、その信仰を持つ当事者一人だけが安心できる方法を与えるだけで、そこから進んで子孫にまで永久に幸福を獲得させられる方法を授けないので、伝統を重んじるにしても、一家の大事件や団体の大事件をこのような宗教団体の指導に一任することは賛成しかねます。

人を区別せずに公平に愛する

真に救われた人は、自分より眼下の人々に対して、肉親や他人を区別せず、公平に彼等を自分の子供として愛することができます。もし形の上では階級や秩序や関係性が異なるために、同じようにはできなくても、心の中には同じ愛を持つのです。

〈駄目な人図鑑〉

これができない人はまだ真に救われている人ではありません。

人類や社会の幸福と発展を願い人格と物質を尊ぶ

真に救われた人は、一般の人々の幸福と生産的な事業の発達を心から希います。社会一般のこと、たとえば学問・教育・衛生・産業等に対して心から発展を祈り助けます。他人の人格を尊重すると同時に、すべての物質も併せて尊ぶのです。道徳的で人道的な精神によって、一切の事を社会本位もしくは国家本位に努力するので、社会や国家や人類の幸福を目的に働くのです。

人の価値を計るときは道徳心のレベルに置く

真に救われた人は、最高道徳を標準として自己を律するのはもちろん、他人を見るときもその標準によります。他人と関係する場合には、学力・知力・金力・権力・その他の力を考慮するのは当然として、その価値を決める真の標準は「道徳心のレベル」に置くのです。

〈駄目な人図鑑〉

もし人間の価値を定める標準を誤って、相手の金力・権力・その他の力に惑わされるようななら、その人はいまだに救われていないのです。

心に人心救済の至誠を持ちながら現実に即して柔軟に進む

真に救われた人は正しき道を歩きます。例えば実際の道路を思い描いてください。高低があり、屈曲があつて、直線的ではありません。この道路の形に沿つて歩けば安全・確実で間違いがないので、かえつて早いのです。無形の道にもやはり高低や屈曲があるのです。ですから真に救われた人は、心に人心救済の至誠を持ちながら、その道路の形に従つて進むのです。

〈駄目な人図鑑〉

直情径行はもちろん、単純な正義の観念によって進むのは、かえつて危険を伴うのです。

たとえば、徳川時代の有名な赤穂義士の復讐事件です。元禄のころ〈十八世紀の初め〉の徳川幕府の権臣吉良上野介は悪人に間違ひないので、当時の幕府官吏の一般的な腐敗として、すべてのことに賄賂を貪っていたのです。ただ吉良は特に甚だしかつたのです。つまりその時代の道は屈曲していたうえに、吉良は特に曲がっていたのです。ですから浅野長矩としては吉良上野に対して、自分の職務執行の教授料を過分に支払うべきでした。しかし長矩とその家臣達は単純な正義の観念によって、屈曲した道路を一直線に突破しようとしたのです。この点で失敗してしまったのです。そうして悪人の吉良も亡び、正義の浅野の君臣もともに滅亡したのです。

不正な相手は形は柔軟にしつつ徐々に精神的に救済する

い真に救われた人なら、不正な個人やは団体を相手にする場合、相手の精神を最高道徳的に救済しようという心使いでその人に接触し、その人の屈曲の程度・方向・その他の内容に応じて、物質的・精神的に喜ばせ、だんだんと善道に導くのです。もし、たとえ相手の悪は改まらなくても、こちらの心使いと行いは自然の大法則に適うので、こちらは幸福になるのです。従来の処世術と最高道徳的な処世術との違いは、このように利己的と愛他的の違いなため、その結果が不幸と幸福との差を生じるのです。

〈駄目な人図鑑〉

現代においては、すべての個人も団体も屈曲しているのです。ですからこれらと関わろうとする人々も利己心によってへつらうように行動しているのですから、たとえ相手方に順応していても、動機が不正なため、やはり滅亡の道を行きつつあるのです。

精神や行動に嘘や脅しはなく、慈悲の精神による救済あるのみ

真に救われた人の一切の心使い・言語・行動には、政策や虚偽、威嚇、破壊といったものはありません。

例) 経営者：職場の管理は抜き打ち巡回よりも普段の德育で

経営者や管理者が工場等を管理する場合、真に最高道徳に救われた経営者なら、本当に必要な場合のほかは、管理者に何度も工場を巡回し、従業員を監視させるような命令はしません。それよりも普段から、慈悲の心をもつて社員の德育に力を注ぐのです。

例) 管理者：職場巡回を開発の機会として捉え社員を慰安し救済する

また命令を受けた管理者が、最高道徳に救われた人であったなら、その経営者の命令の可否は問わず、すぐに命令どおりに工場を巡回し、従業員の精神を慰め安んじます。自分が受けた命令は従業員に対する監視で、なんらかの威嚇的行為であったとしても、自分は慈悲の精神をもつて従業員の精神を救済しようとの機会を利用して、従業員を慰安するのです。このように回数を重ねれば、必ず従業員はその人に心服して最終的に救済され、その人も、経営者も、社員も、全員が幸福になるのです。このように、工場・商店その他どのような団体でも、そ

の幹部に真に救われた人が一人いれば、いつかその全団体が救われる日が来るのです。それほど人ひとりの至誠は実際に尊い価値を持つものなのです。

例) 経営者と従業員：事業の発展よりも相互の幸せと安心を祈る

真に救われた経営者は自分の事業の発展は祈らずに、この事業に集まっている従業員の幸福実現だけを祈り、実現の方法としてその人々の精神を最高道徳に開発し救済しようとするのです。

そして真に救われた従業員なら、自分の幸福は祈らずに、経営者の心を安んじようとして努力するのです。このように救われた人々は偶然にもとも、お互いの安心と幸福を得てしまうのです。

〈駄目な人図鑑〉

工場の経営者側が、従業員の管理者に対して、工場内を巡回し、職工の精神を緊張させ、これによって仕事に努力させようとするのは一つの政策であり、虚偽であり、威嚇なので、その結果は破壊となるのです。各団体における階級闘争はすべて、上に立つ人たちの親心を失った政策的な精神の中で芽生え育ち起きるのです。

相手の課題を見つけたら責めずに育てる

真に救われた人は常に親心を持ち、その心は表裏なくどこから見ても美しいものです。こうした人はもし他人の不正や欠陥を見た場合、相手の前途を心配してすぐに慈悲心をもって忠告や教訓を与え、精神的にも物質的にも育てていこうとします。これが親心というものです。

相手が真に救われた人がなら、すぐに喜んで悔い改めます。こうして双方ともにますます幸福に進むのです。陰に相互に不平を懷いて暗闘するのは、本当に不正な精神と行為です。

・当事者がきかなければ、関係の深い人に迷わず伝える

もし当事者がそれを聴かなければ、その人と深い関係にある人に知らせます。これを知らせるときの精神は、相手を救済するため、攻撃するのではありません。ですから、これを行うのに少しの躊躇も要りません。その相手が伝統や準伝統であっても、過失や世間の悪評がある場合には、慈悲心をもって相手に申告するのですが、この場合は、相手が申告を聴かなかつたとしても、他に知らせることは差し控えなくてはなりません。

・自我の強い人は怒る可能性を考慮して工夫する

最高道徳を聴いたことのない人達は自我が強いので、その自負心を尊重してやたらに忠告や訓戒をすると、かえってその怒りを買うことがあります。ですから特にその方法や時期を考えねばなりません。しかし真の慈悲心をもって対すれば、効を奏することもあります。それでも悔い改めない者は、やむを得ず正義をもって対応するのです。しかしこの場合もできるだけ、温和な処置を執るのです。

自分の行く先・居所・移動の日時を関係者に告げる

真に救われた人は、自分の行く先・居所・移動の日時を必ず直接の関係者に告げておくものです。これは小さな事のようですが、関係者に安心を与えるものですから、当事者の道徳心のレベルを測る一つの標準になります。

〈駄目な人図鑑〉

これを怠るような人は、最高道徳に救われていないのはもちろん、ある意味で普通道徳にも達していないことを表しているのです。

〈k2〉

小さな事だけど、本質的な視点で捉えると、これは「時間と空間=宇宙」に関わる基本中の基本。

他人の過失・欠陥や不正に不平を懷かない

真に救われた人は、他人の過失・欠陥や不正を挙げて、これに対して不平を懷くようなことはないのです。

〈駄目な人図鑑〉

・自分の感情や利害に反すると陰に陽に反対して攻撃する

もしこのような不平の精神作用や反動的な行為あれば、その人はまだ救われていないので、その人には他人を批評する資格はありません。むかしからの因襲的道徳を信条とする人や、単に最高道徳を知的に聴いただけの人は、他人に非行があるときはもちろん、たとえ非行がなくても、自分の感情や利害に反すれば、その人に対して、陰に陽に反対して攻撃するのです。ときには第三者の中傷や一般の風説を信じて、大切な恩人の名誉や利益を損ねるような攻撃をする人もいます。これはいわゆる「片言もって獄を断する」ことで、極めて愚かなことです。

・神の制裁を待てないで他人を傷つけると自分が不運な目に遭う

不正な人は自然の制裁〈神の罰〉を蒙り、悪報は必ずそうなるものです。自分が自然の法則〈神の心〉を信じないで、自然の制裁を待つほどの道徳心のなく、率先して言論や行動を通して他人の非を挙げて憤怒・怨恨・罵詈して他人を傷けるときには、その人自身がすでに自然の法則〈神の心〉に反するので、まずその人が自分の幸運の前途を閉じてしまうのです。もし相手に非行あれば、こちらの言を待たずに、その人には自然の悪報が降ってくるものです。

だからこそ古の人は、慈悲寛大の心なく他人の身のことを見聞きして攻撃する人を「砥石」に譬えているのです。つまり、他を損し、自分の徳も減損して、結局滅亡に終わるからです。

全人格の根本的な改造を経ている

真に救われた人は、前にも何度も述べたように、全人格の根本的な改造を経た人を指すので、従来の道徳や信仰において一つ二つの善事をする人ということを指すのではありません。

〈駄目な人図鑑〉

・一時的&部分的な善行で終わる人

たとえば、最高道徳を聴いて、自分の以前の過ちを改め、例えば大酒をやめるとか、不品行を改めるとか、あるいは寛大になって他人を愛するとか、他人に対して不平の念いを持つのをやめるとか、あるいは最高道徳の一部分を宣伝するとか、様々な善行をするような人であっても、真に救われた人かどうかは分かりません。

このような善行をする人でも、思想的に開発されただけで救済されたのでなかつた場合は、状況が変われば、その心はたちまち昔の利己主義に戻つて、その言動や行いは崩れ落ち、大切な伝統の恩も忘れて自滅の道へと落ちて行くのです。そして結果的に、因襲的道徳の知的道徳と同じものになつてしまふのです。

・知識や表面的な精神が開発されているだけのひと

そもそも人間の精神が単に道徳的開発だけにとどまって、いまだに救済されていないときには、その精神が徹底的に改造されていないのですから、何か一つでも感情的な問題や利害に関する問題が起これば、その行動はどの

ような方向に変わるか分からじ、とても危険です。ですから最高道徳の指導者は、この最高道徳を聴く人達の精神がどの点まで進んでいるかを見分けることがとても必要なのです。

この点、教育的に人心を開発することは、今日世界の平和と人類の幸福上、重大な事業ですが、本当にこれを完成する最後の事業は人心救済でなくではありません。

・自分が真に救われなくては、本当の開発はできない

そこでまず自分が救済れるということが必要になるのですが、自分が救済されるということは、真の慈悲心が起り、その伝統に重大な意味のあることが理解され、感激的にその精神的伝統を自分の救いの親と思うまでの深い念が起こってくることを意味するのです。

そしてそのためにはいかなる犠牲も払い、一家の生命をも捧げるほどの決心を持つに至り、その心に基づいて低い、優しい、慈悲的な真の至誠心を他人の心に移植して、他人を救済したいという心になることなのです。しかし多くの人は最高道徳によって知的に開発されるまでに進むことはあっても、真に救済されるまでになる人は曉天の星より少ないのです。

黙秘の徳が備わっている

真に救われた人というは、前にも何度も述べたように、まずどのような事があっても自己反省をして、自分の品性を完成し、これを他人の精神に移植してその人を救済しようとする真の至誠心のある人です。このように救済された人なら、たとい、

(一) どのような事を見聞きしても、伝統・準伝統、その他の人々の迷惑になることや国家の利害に関係あることはいっさい他言しないようになるのです。

(二) もし一身上の利害問題が起こっても、家族にも話さず、ただ自分の心の中に修めて自己反省の中に葬ってしまうことができるようになるのです。これを「黙秘の徳」〈他人の利害に関する重大なる事件を他言しない道徳〉と言い、最高道徳では重大な道徳としています。すべてにおいて、伝統・準伝統その他の人々の迷惑になることや、国家の利害に関係あることを他言しないからこそ、はじめて自分の真の信用ができるのです。

そして自分の困難を自己反省し、ますます至誠に向かって進んでこそ自分の徳ができて他人の心を救済することが出来るのです。

もし自分の困難や不平を他人に漏らしたなら、誰も自分を信頼して自分に救済される人はいないでしょう。一方に他人の悪を暴き、一方には自己の不平を洩らすのは、普通道徳にも達しない不道徳な人間の類です。

〈駄目な人図鑑〉

ただし、真に人心の開発や救済のために、歴史中の人物や生存中の人物の行動を批判することは、ある程度までは黙秘の原理に衝突するものではありません。ただ、万一、自分に不平・煩悶・憂患があるようでは、全く他人の心を救うことはできません。ましてそれを先方や他人に語るなどあり得ません。だからこそ、どんな事でも自己に反省して感謝生活を続けるのです。このような精神作用と行動が積み重なれば、結果として自分の不完全な品性もだんだんと高まり、運命もまだだんだんと改善され、万世不朽の幸運を開くに至ります。

必ず自己に反省する

要するに、最高道徳によって救われた人は、すべての人に対して、またどのような場合についても、必ず自己に

反省するのです。最高道徳によって救われた人は自己反省ということが充実しています。

・欠点のある目上の人には、祖先以来の徳を尊敬しつつ、最高道徳に導く

もし自分より上の人に対する場合は、たとえ先方の学問や道徳心が低く欠点があっても、その人の祖先以来の徳の高さを考えて、心中ひそかに尊敬の意を表し、その人のすることに留意して善所を学び、自己の欠点を補うことに勉め、真の慈悲心によって徐々にその人を最高道徳に導こうと心掛けるのです。

・目下の人には、慈悲心を持って開発と救済に努める

これと反対に、自分より下の人々には、これまた真の慈悲心をもって、まずその精神を開発し、いつか救済しようと努力するのですから、尊ぶべき品性が自然に生まれてくるのです。

〈駄目な人図鑑〉

いまだに救われていない人や、宗教団体の大部分の信者などは、自分の利害に関する場合はもちろん、その他の場合でも自己反省ということをせず、ただ他人の今の形だけを見て批評しているのです。そして自分の感情や利益に合えば讃め、合わなければ反対するのです。

慈悲心とともに確実で円満な常識が発達している

真に最高道徳によって救われた人は、慈悲心のほかにかなり確実で円満な常識が発達しているはずです。ですからどんな事にも、言語や行為が社会の慣習に反することなく、過激や緩慢に陥ることなく、礼儀や作法に欠けることもなく、質素や奢侈に偏らずに、衣・食・住の程度は境遇に応じて、事業に対して努力を惜しまず、他人に対しては公平で親切が行き届き、伝統や準伝統をはじめ、すべての人々に安心を与える精神をもって、普段から接触する人に対して満足と快感を与えるのです。

〈駄目な人図鑑〉

もしそうではなく他人に不平を懐かせたり、怪訝な気持ちを起こさせるような行動あれば、その人はたとえどれだけ深く最高道徳を信じているとしても、いまだに最高道徳によって真に救われた人と呼ぶことはできません。

〈ただし病者・高齢者は必ずしも道徳の形式を踏むことができないので、除外することはもちろんです〉。

伝統にあたる人を見捨てず、伝統も功労者を見捨てず

真に救われた人は普段から、事業に対して努力することはもちろん、いったん差し迫ったことがあれば、伝統や準伝統のためにどのような犠牲も惜しまず奉仕するのです。たとえば、伝統や準伝統の危急に際しては無報酬で努力するのはもちろん、一身を賭して伝統・準伝統を擁護するのです。そして伝統・準伝統の主体である人々は、たとえ何代の後になってもこうした大功労者とその子孫に対して、どのような疾病・過失・外部の中傷・その他の事故があっても全く見捨てることはできません。〈たとえ職務は授けなくとも衣食の料を与えべきです〉。

〈駄目な人図鑑〉

もし伝統側の人々がこうした功労者を見捨てるようであれば、その伝統側の人々は必ず滅亡するのは、伝統側に反対する人々と同一です。これは歴史の証明するところで、昭として明らかです。

立場を超えてすべての人を育てる真の親心をもつ

真に救われた人は、ただ伝統側をはじめ、すべての人々に安心を与える精神を持つだけでなく、真の親心をもつて、上にも下にも、すべてを育てる精神を持つのです〈前にも一言しています〉。人間を育てるということは、その人を尊敬するとか、愛するとか、犠牲的奉仕をするというような単純な道徳心でできるものではありません。真に最高道徳を体得して神に救われた、真の慈悲心のある人でなくてはできないことなのです。

すべての人間を最高道徳にて育てる心と実行とができた

つまり結局のところ、自分が救われるということはすべての人間を最高道徳にて育てる心と実行とができたということなのです。誰であれこのような「人間を育てる心」ができれば慈悲・至誠・温和・円満な心になって、真の幸福を受けるようになるのです。

〈駄目な人図鑑〉

たとえば、富める者が貧しい人に恵んだり労働者に接する場合に、傲慢で目下の者的人格を無視して軽蔑するからこそ、たとえ物質的には十分なことをしていても、下のもの誰も服しないのです。下の人達もまた傲慢で〈古代科学的研究が開けていなかった時代には、下のものや学者などの傲慢に同情するのも全くの誤りです〉その社会における高い階級にある人々の人格を尊重せず、上のもの的好意をも察せずに、僻んだ心で常に上の意思に反抗する傾向があります。

一例を挙げます。

『礼記』〈檀弓篇下〉に「斎、大いに饑う。黔敖、食を路に為り、もって餓者を待ちてこれに食わしむ。餓者あり、袂を蒙り靴を輯め、賀賀然として來たる。黔敖、左に食を奉げ、右に飲を執りていわく、『嗟、來たりて食え』と。〔餓者は〕その目を揚げてこれを視ていわく、『予はただ嗟来の食を食わず。以にここに至るなり』。従いてこれに謝す。ついに食わずに死す。曾子これを聞きていわく、『微とく「微と」とは餓者の態度が不可なりという意なり』。その嗟というときには去るべし。その謝するや食うべし」という文があります。

その大要を説明すると次のようになります。

中国の斎の国が飢饉のとき、黔敖という人が食物を造り、路傍で餓者を救助したときに、一人の餓者が飢え疲れて衣服も靴も正しく着けられず、朦朧とした様子でやってきました。

そのとき黔敖は、左手に食物を持ち右手に飲料を執って「さあ、来て食え」と言いました。餓者は怒って目をむいて言いました。俺は「嗟来の食（人を見下して投げ与えるような食べ物）」は食わないから、こんな風に植えたんだ！

そのまま去ろうしたので、黔敖はその後を追って自分の無礼を詫びたのですが、ついに食わずに餓死してしまいました。

孔子の十弟子の一人である曾子がこの事について「この餓者の態度はとても原則に合っていない。黔敖が餓者の人格を無視したのなら去るのもいいが、自分の無礼を詫びたのであれば、黔敖の与える食物を食べるべきだ」と言つたいう内容です。

一般の人はこのように、上に立つものは傲慢で他の人格を無視するため、たとえ常に慈善にお金を出す裕福な人であっても、その恩に感ずる人や真の味方は一人もいないのです。ひどい場合は家族にも怨まれている人がいるのです。ですから、労働問題や小作問題が起こるのはやむを得ないことです。下のものの心理も上のものと同様で傲慢なため、たとえ上のものに反抗して餓死しても、その仲間のほかに真の同情者はないのです。

心に角を持たず傲慢さや反抗的な態度はとらない

いま、最高道徳によって真に救われた人は、他人を育てる心を持っていましたから、たとえ社会の上にいても下にいても決して角を持たず、傲慢さや反抗の態度をとて自ら損失するようなことはありません。

疲労が比較的軽い

これに関連して、もう一言添えておきます。それは親心を持もって自ら神に救われ、他人に対して談話を行い、事業に努力している場合には、その疲労が比較的軽いのです。

〈駄目な人図鑑〉

これとは逆に、自我によって、感情や利害関係を心に抱いて談話や行動をするときには、その疲労は比較的多くです。この両者の累積の結果の違いは、大いに考慮しなくてはならないことでしょう（第四章参照）。

欠点があってもアドバイスであらためる

なお一つ注意しておきたいことがあります。それは真に救われた人でもその人の先天的な性質によっては、言語や行為にいろいろな欠陥があることがあります。様々な過失を繰り返したり、最高道徳の詳細を心得ずに応用を誤ることがあります。こうしたことはその人の欠点には相違ありませんが、すでにその人の精神に最高道徳の真髓が浸み込んで、その人が真の改心をして最高道徳の根本を捉えていたなら、これらの欠点は枝葉のことに属するので、先輩の慈悲心によって改めさせることができます。

〈駄目な人図鑑〉

もし、その人がこうした場合に先輩の注意を無視して自己反省をしなかったなら、その人はいまだに真に救われていないので、取るに足らぬ人にすぎません。

以上列挙した、人心救済に関する原理と方法を要約すれば次のようにになります。

真に最高道徳の原理によって開発されている

最高道徳による人心救済とは、まず自分が救済されることで、真に最高道徳によって救済されたということは、真にその原理によって自分の心が開発されたということであるのです。この最高道徳による救済は、従来のような開発の伴わない偶然的・突発的・形式的な救済とは異なります。

〈駄目な人図鑑〉

従来、宗教的団体にはこうした自然の法則に反する信仰が行われ、中には非常の悪人や放蕩児が急に善人に変わることなどはあっても、こうした不自然な信仰はある種の感情にほかならないのですから、日を経てその改心者の感激が薄らぐか、なにかよい地位を得ると、旧来の悪心や悪癖が再発して再び世を害するようになります。

自分の最高品性が完成されており従来の宗教のような弊害は生まない

この最高道徳によって、真に自分が開発され救済されたということは、自分の最高品性が完成されたということです。最高道徳における人心救済の動機・目的は徹頭徹尾自己の品性の完成にあるので、他の個人や国家、社会

などを救済するのは、自己の品性完成の方法にすぎず、全く物質的ではありません。だからこそ最高道徳は永久に従来の信仰ののような弊害を生しないのです。

精神的・物質的法則を体得して生存・発達・安心・幸福となる方法を悟っている

その最高道徳とは、自然の法則、つまり宗教的にいえば神の法則の全部を指すのです。ですから最高道徳に救われるということは、人間の精神的・物質的生活の法則を体得して、真に自己の生存・発達・安心そして幸福となる方法を悟ったということになるのですから、真に最高道徳に救われた人は従来の信仰ののような偏狭なものではないのです。

〈駄目な人図鑑〉

ただしこの最高道徳の人心救済法を、単なる一つの処世術〈従来のいわゆる処世術は政策的なので神の法則に合わず、最高道徳的処世の方法は神の慈悲心に立脚するので神の法則に合うのです〉と誤解するようなことがあつては大なる誤りです〈第十五章第一項参照〉。

20251204

コメント：

誤字脱字がたくさんありますね。いずれ探して直す予定ですけど、ひとまず共有先行します。